資料紹介

# 「木村探元筆聖賢図巻」について

山下廣幸

木村探元は、江戸時代中期の薩摩画壇を代表する絵師である。探元は、延宝七（一六七九）年七月一八日、鹿児島城下に生まれ、幼名を金平と称し、のち金左衛門と改めた。元禄四（一六九一）年、郷土の絵師小濱常慶について画を学んだ。元禄一六年になると江戸に赴き、狩野探信の門に入り、探幽の画法等を学び、二年後の宝永二（一七〇五）年に帰郷した。宝永四年、島津家二一代吉貴の剃髪すべきの命を受け、探元という名を賜った（鹿児島市立美術館の「木村探元展」図録中の年譜において、探元という名は探信へ入門していた時に名乗った可能性を指摘している）。享保一一（一七二六）年、吉貴の国夫人於須磨の方が伊勢神宮へ参拝のため旅した時に同道し、京都において近衛家久に謁見している。さらに享保一九年には、近衛関白家久に招かれ、門人の押川元春、能勢探龍を伴い京に上り家久に対面する。この直後勅許により法橋位を授かり、近衛家のために花鳥図屏風一双、また翌年の始めには真景の山水図屏風を奏呈した。同じ頃、禁裏御用の衝立や屏風も献上しており、近衛家久から大貳の呼び名を賜った。この後、近衛家において元春、探龍と共に席画を行い、鹿児島に帰った。この間の探元自身の記録が、「探元上京日記」として伝えられるものである。探元は、明和四（一七六七）年八九歳の高齢で歿するが、島津家や近衛家をはじめ多くから依頼を受けて多数の作品を残している。

薩摩では古くから名画、名書を見ると「美事探元（ミゴッタンゲン）」と言って賞賛の意を表わすことがある。このことは探元が、薩摩における絵師の第一人者として認められていたことを示していると言えるだろう。

また、探元は書も良くし、和歌も多く作り、茶器その他の古物も好むというような幅の広い人でもあったようである。

一方、元春、探龍のほかにも多くの門弟を育て、森探瑞、和田雪観、永井探謙、市成弥平太、安山親定、竹崎元章、白石探隠などが知られており、その残された作品には探元の画風がしのばれるようである。

探元の作品については、昭和六二年十月、鹿児島市立美術館で「木村探元展―近世薩摩画壇の隆盛―」が開催され、この特別展において現在展示できる代表作のほとんどが紹介された。当館からは、探元の作品八点を出品したが、ここで紹介する「聖賢図巻」もその中の一点で玉里島津家から受託中のものである。

この「聖賢図巻」は、作品中には落款はないが、格納箱に「探元斎筆」の箱書きがあること、玉島島津家伝来の作品であること及びその作品の程度が高いことなどから考えて、探元が献上品として制作したものと思われる。この図巻は三巻からなり、大きさは縦三五・二センチメートル

聖賢図巻の格納箱

聖賢図巻全三巻

で、長さが第一巻九一〇・〇センチメートル、第二巻七六一・〇センチメートル、第三巻七六〇・〇センチメートルあり、紙本に墨画着彩の技法で制作されている。そして、第一巻に四〇名、第二巻に三四名、第三巻に三三名、合計一〇七名の中国歴代の皇帝、聖人、文人、武将などが描かれている。その人物名を示すと、次のとおりである。

**第一巻**

1 伏羲
2 神農
3 黄帝
4 少皞
5 顓頊
6 帝嚳
7 帝堯
8 帝舜
9 夏禹
10 殷湯
11 周文王
12 武王
13 漢高祖
14 漢文帝
15 漢景帝
16 漢光武
17 蜀先主

**第二巻**

1 許魯齋
2 真西山
3 周濂溪
4 劉雲莊
5 謝安
6 謝玄
7 屈原
8 項王
9 顔真卿
10 蔚遲敬德
11 呂東萊
12 朱晦菴
13 文中子
14 房玄齢
15 楊亀山
16 黄山谷
17 契

**第三巻**

1 陶淵明
2 檀道濟
3 （孔子）
4 老子
5 王羲之
6 謝霊運
7 賈島
8 孟東野
9 蘇東坡
10 張横渠
11 厳子陵
12 楊子雲
13 郭子儀
14 李白
15 程伊川
16 程明道
17 張子房

| | | | |
|---|---|---|---|
| 18 | 魏太祖 | 18 伊尹 | 18 董仲舒 |
| 19 | 呉太帝 | 19 后稷 | 19 張南軒 |
| 20 | 東晋元帝 | 20 李勣 | 20 岳飛 |
| 21 | 南朝宋武帝 | 21 呂蒙 | 21 周公 |
| 22 | 宋文帝 | 22 諸葛孔明 | 22 太公 |
| 23 | 斉高帝 | 23 杜如晦 | 23 包拯 |
| 24 | 梁武帝 | 24 李靖 | 24 高太尉 |
| 25 | 陳武帝 | 25 杜預 | 25 蒼頡 |
| 26 | 隋文帝 | 26 王導 | 26 皐陶 |
| 27 | 唐高祖 | 27 司馬懿 | 27 白楽天 |
| 28 | 唐太宗 | 28 陶侃 | 28 杜甫 |
| 29 | 武則天 | 29 東方朔 | 29 司馬温公 |
| 30 | 唐玄宗 | 30 司馬遷 | 30 邵康節 |
| 31 | 唐憲宗 | 31 姚崇 | 31 蔡九峯 |
| 32 | 唐宣宗 | 32 宋璟 | 32 蔡西山 |
| 33 | 李後主 | 33 柳子厚 | 33 狄仁傑 |
| 34 | 宋太祖 | 34 韓退之 | |
| 35 | 宋仁宗 | | |
| 36 | 宋高宗 | | |
| 37 | 宋孝宗 | | |
| 38 | 宋寧宗 | | |
| 39 | 昭明太子 | | |
| 40 | 閩王審知 | | |

ここでは、これらの人物画像を紹介し、中国のいろいろな人物について人名辞典風にまとめてみたが、各種の美術・工芸作品に実際にあたった場合など、その作品に描かれている人物名、画題などわかりにくい場合が多いので、このような場合に参考になれば幸いである。

次に、この小論を書くにあたって参考にした書籍名をあげておく。

東洋史辞典　京都大学文学部東洋史研究室編　東京創元社　昭和四九年
新版世界人名辞典　東洋編　河野利夫・中村義編　東京堂出版　昭和六二年
中国の歴史（全一五巻）　陳舜臣　平凡社　一九八一年
人物　中国の歴史（全一一巻）　常石茂編　集英社　一九八一年
世界各国史9　中国史（新版）　鈴木俊編　山川出版社　昭和五八年
中国の歴史（全三巻）　貝塚茂樹　岩波新書　一九八八年
中国の歴史（全十巻）　貝塚茂樹ほか　講談社　昭和四九年
中国の古典シリーズ4　抱朴子　列仙伝　神仙伝・山海経　平凡社　一九八四年
中国の思想13　中国の故事名言　松枝茂夫監修　徳間書店　昭和四二年
中国古典詩聚花（全十三巻）　中国古典詩総説　小学館　昭和六十年
中国の故事　神々の巻　石田博　雄山閣　昭和五三年
NHK漢詩をよむ　石川忠久　日本放送協会　昭和六二年
史記列伝（全五巻）　小川環樹ほか　岩波文庫　一九八七年
東洋書題綜覧　金井紫雲編　歴史図書社　昭和五十年

一一一　伏羲

中国の伝説上の人物で、神農、女媧とともに三皇の一人である。易の八卦を作り、また網を発明して人々に漁や猟の方法を広めたと伝えられ、人類の恩人と称せられる皇帝である。

一一二　神農

中国の伝説上の人物で、伏羲、女媧とともに三皇の一人である。別に炎帝とも呼ばれ、木を削り農具を作って人々に耕作の方法を教え、また市場を設けて商業の方法も教えたと伝えられる皇帝である。

一一三　黄帝

中国の伝説上の人物で、五帝の一人と言われる。五帝は、司馬遷の「史記」に出てくる皇帝で、黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜のことである。神農と戦い、これを破って皇帝となったと伝えられている。この皇帝は、中国の皇祖、漢民族の大宗として仰がれている。

一一四　少皞

中国の伝説上の人物で、秦の始皇帝の宰相呂不韋の「呂氏春秋」に出てくる五帝（太皞、炎帝、黄帝、少皞、顓頊）の一人で、五行思想に対応させ春夏秋冬の秋にあてられている。

一一五　顓頊

中国の伝説上の人物で、五帝の一人と言われる。黄帝の孫で、小昊に代って皇帝となったと伝えられている。また、暦を作った神として知られている。

一一六　帝嚳

中国の伝説上の人物で、五帝の一人といわれ、黄帝の曽孫で、七〇年間在位したと伝えられている。

一一七　帝堯

中国の伝説上の人物で、五帝の一人と言われる。帝嚳の子で天下を良く治めて人々はその徳をたたえたと言われている。

一一八　帝舜

中国の伝説上の人物で、五帝の一人と言われる。父母に良く仕え、その孝徳は広く天下に聞え、帝堯の二人の娘を妻にして、その後をついだと伝えられる。

一一九　夏禹

夏王朝の始祖と言われる人である。帝堯の時代に大洪水が起り、治水事業に功績をあげたのが禹で、堯から帝位を継ぎ、国を治めたと伝えられる。

一二〇　殷湯

紀元前一、六〇〇年頃に成立したと言われる殷王朝の始祖成湯大乙のことである。大乙は、伊尹という賢臣を用いて夏の桀王を破り河南省の黄河流域に国家を成立したと伝えられている。

一二一　周文王

西周初期の人で、名を昌といった。文王は、西にも東にも周の領地を広げ、周族の繁栄に努めた。また、天下の賢士を求め、そのうちの一人が良く知られている太公望呂尚である。殷の紂王に捕えられたこともあったが、都を岐山から酆に移し、周はますます強大となった。その子武王が殷を滅ぼして周を創建した。

一二三　武王

周王朝の創始者で、名は発という。父文王のあとを継ぎ、太公望、弟の周公旦などのすぐれた臣下にめぐまれ、殷の討滅にとりかかった。文王の遺志が東征であることを人々に示し、黄河を渡って北進し、殷の都に向った。殷の紂王も兵を出し戦ったが、ついに武王に敗れ殷は滅んだ。

一一三　漢高祖

劉邦のこと。劉邦は沛県の農民の出身で、泗水の亭長から討秦の兵を起した。彼の周囲には、遊侠の徒のような集団がおり、そのなかに蕭何、張良、韓信のような有能な人々もいた。彼は項羽に先んじて秦の本拠地関中をおとし、漢王と呼ばれた。その後、項羽との戦いは数年続いたが、遂にこれを破り帝位につき、国を漢と称し、都を長安に定め、劉氏天下の基礎を固めた。

一一四　漢文帝

前漢五代の皇帝で、名は恒という。劉邦の死後、呂皇后が権力をふるい、幼帝をたてるなど呂氏の一族が政治を独裁した。皇后が死ぬと、劉邦の皇子文帝が皇帝となり、呂氏一族を滅ぼし、政治の実権を奪いかえした。

一一五　漢景帝

文帝のあとをついだ前漢六代の皇帝で、名を啓という。景帝は、領地をとりあげるなど諸侯を圧迫したため、呉楚七国の乱が起ったが、これを平定した。この後、諸侯は領地の支配権を失い、中央集権的な行政組織が完成した。このほかにも種々の行政改革を行い、安定した治世を送った。

一一六　漢光武

後漢初代の皇帝で、名を秀という。前漢景帝の王子から分かれた皇族の子孫で、豪族大地主であった。前漢末の混乱の後、王莽が新国を建設するが、光武がこれを破り、洛陽を都とし、年号を建武と改め天下を平定した。光武帝は、儒者の風があり、行政に良く通じ、従来の悪弊を一掃し、民政にも力を入れるなど国の繁栄に努力した。

一一七　蜀先主

蜀漢の王で、劉氏、名を備という。照烈帝と称す。魏が漢王朝を滅ぼした後、漢の王位をうけつぐために帝位についた。魏蜀呉三国の鼎立の時代である。

一一八　魏太祖

魏の祖曹操のことである。後漢の末期に現われ、山東省から河南省をおさえ、後漢の献帝を擁立して権力の強化をはかった。しかし、孫権、劉備と湖北の赤壁で戦ったが大敗した。この戦いは、天下の三分を招き、曹操は魏王の位についた。種々の政治改革を進め、華北一帯を支配した。いっぽう、彼には文学の才能があり文学の諸士を招き、いわゆる建安文学の隆盛をきたした。

一一九　呉太帝

三国呉の太帝、孫権のことで、孫堅の子である。赤壁で、曹操を劉備とともに破ったが、後には魏と結び帝位についた。中国の南方一帯を治めたが、八〇年晋に滅ぼされた。

一一二　東晋元帝

東晋初代の皇帝である。司馬懿（西晋宣帝）の子孫で、名は睿という。西晋滅亡の後、東晋を建国し、かろうじて漢人王朝の命脈を保った。

一一二　南朝宋武帝

南朝宋の初代皇帝で、劉裕という。東晋の末に五胡の諸国を征服し、安帝を守り、さらに恭帝の禅譲をうけ、国号を宋と称した。東晋の桓温の「土断」政策を積極的に推し進め、国力の強化をはかった。

一一三　宋文帝

南朝宋の三代皇帝で、義隆という。治政に力を注ぎ、国内の学問を進め、元嘉（文帝の年号）の治と呼ばれる南朝第一の平和な時代を実現した。しかし、対外的勢力伸張には失敗をくり返していた。

一一三　斉高帝

南朝斉の初代皇帝蕭道成のことである。南朝宋の末期に活躍し、四七九年順帝の禅譲を受けて皇帝となった。その後、戸籍を整えたり、各武将の力をおさえる等の政治改革を行った。また、自らも質素、検約の模範を示した。

一一四　梁武帝

南朝梁の初代皇帝蕭衍のことである。斉の末期政治は乱れ、諸侯の心は王朝からはなれたが、蕭衍はこれらをまとめ、五〇二年梁を建国した。しかし、晩年には仏教を尊信するあまり、刑政をゆるめたり、武備を廃したりしたため政治は混乱した。また、東魏の侯景の反乱にあい、失意のうちに歿した。

一一三五　陳武帝

南朝陳の初代皇帝陳霸先のことである。侯景の乱後梁の国力は衰微した。この時、陳霸先は梁の敬帝を擁して立ち、その後禅譲により五五七年、陳を建国し皇帝となった。

一一三六　隋文帝

隋の初代皇帝楊堅のことである。北周の勢力が発展する過程で、楊堅は力を伸ばし、北斉の討滅に活躍した父のあとを継ぎ、隋国公となった。その後、娘を北周の宣帝の妃とし、その子の静帝が幼少であることから禅譲によって、五八一年隋を建国した。五八七年には、南朝陳も滅ぼし、久しく南北に分かれていた中国を再統一した。

一一三七　唐高祖

唐の初代皇帝李淵のことである。隋末には群雄割拠の状態となり、群雄の多くは隋に代ろうと考えていた。隴西の李淵もその一人で、各地の豪族や官僚と手を結び勢力を固めた。隋の煬帝が江都の離宮にあった時、都の長安は動乱の中心となった。この時、李淵は兵を挙げ、煬帝の孫恭帝を擁立し、禅譲をうけ、六八一年唐を建国した。その後、群雄を平定し、六二八年唐の統一を完成した。

一一三八　唐太宗

唐の二代皇帝李世民のことである。唐の高祖李淵の第二子で、すぐれた天性をもち、長じて房玄齢、杜如晦、魏徴、李靖などの名臣、勇将を用い、父を助けて唐の統一に力を注いだ。その後、兄弟と不和を生じたがこれを倒し、父のあとを継いで帝位についた。彼は、政治の統一に力を注ぎ、制度を整備するなどの改革を進め、貞観（六二七―六四九）の治と呼ばれる安定した治世を実現させた。

一一二九　武則天

唐の三代皇帝高宗の皇后則天武后のことである。高宗は病身であったため、武后に決裁をまかせるようになり、後には摂政のごとくであった。天后と称され、高宗が死ぬと、子の中宗を立てたが、まもなく帝位から下ろし、自ら皇帝と称して唐の国号を周と改めた。中国歴史上、唯一の女帝であり、その治世は五十年間に及んだ。

一一三〇　唐玄宗

唐の六代皇帝李隆基のことである。睿宗の第三子で、父を良く助け、父の即位に協力した。間もなく、その位を譲り受け、帝位につき「開元の治」といわれる大唐帝国の最盛期を実現した。この実現には、姚崇、宋璟、張九齢等の賢臣の活躍があった。玄宗も治世の後半になると政治に興味を失い、楊貴妃を溺愛するようになり、急速に政治の腐敗を招き、社会不安を生じた。やがて、安禄山の乱が起り、四川に逃避するなど晩年は不幸であった。

一一三一　唐憲宗

唐の十一代皇帝李純のことである。父順宗が病身であったため、短期間であとを継ぎ、杜黄裳等の賢臣を用い、治世に力を注いだ。晩年には、宦官に対する抑圧を計ったが、かえって彼らの手にかかって暗殺された。以後、皇帝の後継者決定が宦官の手に委ねられるようになった。

一一三二　唐宣宗

唐の十六代皇帝李忱のことである。

一一三　李後主

五代十国時代の南唐三代皇帝李煜のことである。李煜が国主の時代、宋は呉越国と連合して南唐を攻め、これに滅ぼされた。彼は宋の都開封に連行され、そこで幽閉中に死んだ。李煜は先帝の李璟とともに詩人としてすぐれ、南唐の二主と呼ばれている。

一一三　宋太祖

宋の初代皇帝趙匡胤のことである。初め後周に仕えていたが、名君といわれた世宗が病死した後の皇帝が幼少の恭帝であったため、これに不信をいだく部下の将兵に擁立され、恭帝の譲りを受けて即位し、国号を宋と称した。中央集権体制の確立につとめ、財政の確立、農業の奨励につとめるいっぽう、民心の安定、儒学の発展等をはかり、治績をあげた。

一一三五　宋仁宗

宋の四代皇帝趙禎のことである。十三歳で即位し、四二年の永きにわたって在位した。この間に韓琦、范仲淹、欧陽修等の賢臣を登用して宋の最盛期を現出した。しかし、この時代には、西夏の西北辺への侵略が頻繁になってきた。

一一三六　宋高宗

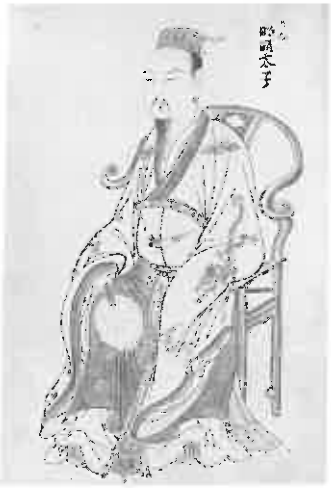
南宋の初代皇帝趙構のことである。宋の八代皇帝徽宗の第九子で康王に封ぜられた。金軍が侵入し、徽宗や欽宗が捕えられると、南京で即位した。当初は、岳飛等の主戦派が力を持ったが、やがて徽宗や欽宗を救出したい高宗は、秦檜等の和平派を重用するようになり金と屈辱的な講和を結んだ。この時代は、武力的には弱体であったが、文化面では栄えた。

一一三七　宋孝宗

南宋の二代皇帝趙昚のことである。高宗の実子は早く死んだため、養子に迎えられ帝位についた。高宗の時代に比べ、主戦派が優勢となり、岳飛の名誉も回復された。孝宗の治世は、南宋の最盛期で、江南の開発を進め、財政を豊かにした。南宗諸帝のなかで第一の名君といわれる。

一一三八　宋寧宗

南宋の四代皇帝趙拡のことである。光宗の第二子で、病気の父に代って即位した。しかし、すぐに韓侂胄の専政となり、寧宗の治世は奮わなかった。



一一三九　昭明太子

梁武帝の長子蕭統のことである。幼年の頃から儒学に通じていたが、後には仏教にも関心をいだくようになった。太子が撰した「文選」は、周から梁代の文章詩文を撰集したもので、奈良、平安朝の日本の文化人も愛読し、我が国に与えた影響は大きい。

一一四〇　閩王審知

王審知は、群盗の出身であるが、唐から威武節度使に任ぜられた。それ以後、地方政権ともいうべき閩国を治め、南唐に滅ぼされるまで約五〇年続いた。閩国は、外国との交易に力を注ぎ、福建の地はこの時期に大いに発展した。

二―一　許魯齋

二―二　真西山

南宋の儒学者真徳秀のことである。福建の人であるが、選ばれて南宋の翰林学士となった。政治の刷新を唱え、当世要務に関する十万言の上書を奏上した。程朱の学を継ぎ、小朱子と言われ、西山先生と呼ばれている。著書に「真西山先生文集」「大学衍義」等がある。

二―三　周濂溪

北宋の儒学者周敦頤のことで、濂溪はその号である。湖南省道県の人で、幼少の時父を失い、母方の実家で養われた。官吏としても活躍したが、著書に「太極図説」と「通書」がある。彼の思想は、儒教に道家の思想が多く入れられ、仏教の影響も見られる。道学の祖といわれ、学説は程顥・程頤兄弟に受け継がれ、南宋の朱熹の時に大成された。

二―四　劉雲莊

宋の詩人劉爚のことと思われ、「雲莊集」を撰した。

## 二―五　謝　安

東晋中期の政治家で、字は安石という。四〇歳になってから官吏となり、後には宰相となった。前秦の符堅の侵攻という最大の国難にあたっては、甥の謝玄等を派遣し、淝水でこれを破り、名宰相といわれた。

## 二―六　謝　玄

東晋の将軍で、字は幼度という。前秦の符堅が大挙して淝水に迫った時には、先鋒として活躍し、大勝利を得た。この戦いは、淝水の戦いと言われ、東晋最大の国難であった。この戦い以後、華北一帯は混乱をくり返すようになり、南北朝の対立を決定づけた。

## 二―七　屈　原

戦国時代楚の貴族で、詩人として知られている。はじめ懐王に信任されていたが讒言にあってしりぞけられ、その子の頃襄王の時にも放逐されたために汨羅の淵に身を投げたと伝えられる。屈原は楚の国運を嘆き、離騒、九歌、天問、九章等の詩を作ったと言われ、「楚辞」に収録されている。

## 二―八　項　王

秦末に劉邦と争った武将項羽のことと思われる。字は籍といい、最初は劉邦と連合して秦を倒し、一時劉邦より優位に立った。しかし、次第に劉邦の方が政戦両略とも勝るようになり、垓下の戦いで戦死した。

二一九　顔真卿

唐の名臣、書家として知られ、名は清臣という。幼少から学問にすぐれ、詩も良くした。玄宗の時に進士となり、安禄山の乱では義勇兵を募って賊軍討伐に活躍した功労者であったが、讒言にあって最後は殺された。書道の名手で、多宝塔碑、顔氏家廟碑、争座位稿等の書が良く知られている。

二一〇　蔚遅敬徳

唐の武将尉遅敬徳のことである。李勣等とともに唐建国のために尽した。もとは敵方の武将であったが、李世民の捕虜となり、のちには重用されるようになった。

二一一　呂東萊

北宋の学者、詩人として知られる呂本中のことで、字は居仁である。劉安世の学統を継ぎ、東萊先生と呼ばれた。著書に諸儒家の説を集大成した「春秋集解」や「紫微雑説」等がある。また、詩集に「東萊詩集」（二〇巻）がある。

二一二　朱晦菴

宋代の儒家朱熹のことで、字は元晦、晦菴は号である。文公と諡されたが、一般には尊称して朱子と言われる。寧宗の時代、朱子は登用されたが、韓侂胄におとしめられ、その学問は偽学とされ禁止された。朱子は失意のうちに歿したが、次の時代には見直され、儒学の正統とされた。朱子学は北宋の新しい学風を集大成したものであるが、日本、朝鮮の学問にも大きな影響を与えた。

二―三　文中子

隋の学者王通のことで、字は仲淹である。幼少から学問を好み、唐初の魏徵、房玄齢、李靖等の賢臣は皆王通の門人であるといわれている。しかし、実在を疑われる人物でもある。

二―四　房玄齢

唐初の政治家で、字は喬である。太宗が敦煌公の頃から知己を得て、側近にあって唐建国に尽力した。太宗の信任は厚く、杜如晦とともに政治の改革にあたった。宰相の位にあること一五年、七一歳で歿した。

二―五　楊亀山

宋の学者楊時のことで、字は中立、亀山はその号である。宋の官吏として勤めながら、程顥、程頤に師事して学問にも励んだ。一時政治を非難して官をやめさせられたこともあったが、退官後は学問中心に活躍し、二程の教えを継ぐ者として尊敬された。

二―六　黄山谷

北宋の詩人、書家として知られる黄庭堅のことで、字は魯直、山谷はその号である。蘇軾の弟子で張耒、晁補之、秦観とともに「蘇門の四学士」と呼ばれる。官吏としても活躍していたが、政争にまきこまれ、宜州に流されて六一歳で死んだ。書は、魏・晋等先人の書風を理想とし、特に草書は個性的であると言われる。

二一七　契

殷王朝の開祖といわれている。

二一八　伊尹

殷湯王を補佐して夏桀王を亡ぼし、国内においては善政を施したという、伝説上の名宰相である。

二一九　后稷

周王朝の始祖と伝えられる伝説上の人物である。母の姜原が巨人の足跡を踏んで妊娠したため、これを不祥として三度すてたが、死なないので棄と名付けた。成人すると農耕を好み、人々に農業を教えた。舜の時に農官となり、后稷と号し周王朝の始祖になったという。

二二〇　李勣

唐初の武将で、はじめ隋末の群雄のひとり李密に仕えていたが、のち唐に帰順し、太宗から李姓を賜った（旧姓名は徐世勣である）。貞観の始めには太宗を助け、突厥や高麗等を討伐し武功を上げた。李靖等と共に唐朝初期の国力拡大に働いた功臣である。

二―三　呂蒙

三国時代呉の名将で、各地の戦いで戦功を上げた。魏の曹操を苦しめ、また蜀の関羽を討って呉の勢力拡大に働いたが、病身であったために四二歳で歿した。

二―三　諸葛孔明

三国時代蜀の政治家で、名は亮、孔明は字である。劉備は、孔明の草廬を三度訪ね、家臣になるよう要請した。これに感激した孔明は、天下三分の計を説いて仕えることになった。以後、劉備を補佐し、呉と連合して曹操の魏軍を赤壁で破った。劉備の死後も幼帝を助け、出師の表を奉り北伐にあたったが、司馬懿の魏軍と五丈原で対陣中歿した。

二―三　杜如晦

唐初の政治家で、字は克明である。房玄齢の推挙で太宗に仕えた。玄齢の深謀に対し、決断力を発揮した。一時讒言にあって迫われたこともあったが、終始太宗の信任が厚く、玄齢、魏徵とともに唐王朝治世のために尽した。

二―三　李靖

唐初の武将で、字は藥師である。はじめ隋に仕えていたが、後太宗に認められ臣となった。以後、李勣等とともに各地を討伐した。太宗の貞観の治実現に功績のあった名将である。

二―三五　杜預

西晋の武将、学者で、字は元凱である。武帝に良く仕え、政治の改革にあたり、また経済の諸政策も行い成功した。呉との戦いにおいては、総指揮官に任ぜられて大功をあげた。後には春秋左伝の研究に力を注ぎ、その研究の基礎を作った。

二―三六　王導

東晋の政治家で、字は茂弘である。元帝を補佐し、彼を晋帝の位につけるために尽力した。東晋朝は、何度も危機にあったが、王導は寛仁の政治で、寄合世帯の東晋をうまく運営した。元帝の後にも明帝、成帝に仕え、王氏は江南第一の貴族となった。

二―三七　司馬懿

三国時代魏の武将、政治家で、字は仲達である。曹操に認められ、また子の曹丕とも親しく要職を勤めた。蜀の諸葛亮の遠征にあたっては、五丈原に対陣して持久策をとった。魏の文帝、明帝、廃帝三代に仕えた功臣であったが、後にはクーデターを行い孫の炎（武帝）が西晋を興す基礎を作った。宣帝と諡されている。

二―三八　陶侃

東晋初期の武将、政治家で、字は士行である。陶淵明の曽祖父にあたり、はじめ郡県の官吏であったが、後認められて都に出て、軍功をもって実力を拡大した。揚子江上流で勢力を持ち、東晋のために尽力した。

二―二九　東方朔（とうほうさく）

前漢の文人で、武帝に仕えた。公卿に屈せず滑稽、弁舌、奇行、諷刺をもって良く知られている。仙術で百八歳の長寿を得たとの伝説もあり、古来めでたい画題として描かれる。

二―三〇　司馬遷（しばせん）

前漢の歴史家で、太史令司馬談の子である。字は、子長という。幼時から古文を読み、各地を周遊して諸侯の記録を収集した。父の死後その仕事を継ぎ、修史の仕事を続けた。その後、武帝の怒りにふれて宮刑に処せられたが、それでも修史の仕事を続けて「史記」（一三〇巻）を完成した。これは、はじめて紀伝体で書かれた史書として知られている。

二―三一　姚崇（ようすう）

唐の名相で、字は元之である。則天武后に知られて取り立てられる。一時失脚したこともあるが、玄宗が即位すると再び宰相となり、玄宗を助けて開元の治世の基をつくった。太宗時代の貞観の治世に活躍した房杜（房玄齢・杜如晦）に対し姚宋（姚崇・宋璟）といわれる。

二―三二　宋璟（そうけい）

唐の名相で、若くで進士となり、則天武后、睿宗に仕えた。一時失脚したが、玄宗の時に宰相となった。姚崇とともに玄宗を助け、開元の治世に功があった。

二―三　柳子厚

唐時代中期の文人柳宋元のことで、子厚は字である。幼少の頃から詩文を良くし、進士に合格し頭角をあらわした。官吏としては恵まれなかったが、韓愈とともに古文運動を進め、文学の面で活躍した。唐宋八代家の一人に数えられている。

二―四　韓退之

唐時代中期の文人韓愈のことで、退之は字である。進士に合格し、中央・地方の官吏として活躍した。彼は六朝以来の駢儷体の文学の行きづまりを打破し、古文の復興に力を尽すとともに儒学の復古もはかった。柳宋元とともに唐宋八大家の一人である。

三―一　陶淵明

東晋の詩人で、名は潜、字は元亮とも伝える。東晋の武将陶侃の曽孫である。彭沢の令となったが、わずか八〇日余で「帰去来辞」を残して帰郷したことは良く知られている。彼は、田園詩人、自然詩人と言われ、また隠逸詩人の宗と言われている。

三―二　檀道濟

三―三（孔子）

春秋時代の思想家あるいは儒家の始祖といわれる人で、名は丘、字は仲尼である。幼時から魯の伝統文化を学び、魯国の政治を改革しようとしたが失敗した。諸国を周遊の後帰国し、子弟の教育にあたった。孔子の思想の根底は「仁」であり、死後弟子達が言行を集めたのが「論語」である。儒家の始祖として後世尊敬された。

（画中に孔子の記名はないが、次の老子と考え合わせて孔子とした）

三―四　老子

中国古代の思想家である。老子の思想は、儒教の教えに対する反論であり、本来自然無為の道にかえることを説いている。道徳を説くので道家と言い、また荘子が継承したので老荘の学とも言う。この思想は、儒学とともに中国思想史上の重要な位置をしめている。

三―五　王羲之

東晋の書家で、字は逸少といい、宰相王導の従子である。官吏としても右軍将軍、会稽内史となり、活躍した。早くから遁世の志をもち、山陰の蘭亭に諸名士を集め詩を作り、それに序をつけたことは良く知られる。隷書を良くし、楷・行・草書にわたって新しい書を完成して、書聖として尊敬された。

三―六　謝霊運

南宋の詩人で、六朝山水文学の第一人者として知られ、東晋の将軍謝玄の孫である。早くから文才を認められ、風光明媚な永嘉の地に移ってからは、多くの山水詩を作り、当代一流の文化人と言われた。

三―七　賈島

唐の詩人で、字は浪仙である。初め僧となって活躍していたが、のち韓愈に詩文の才能を認められ、還俗して官吏となった。推敲苦吟の詩風は、この頃から始まったと言われる。「賈長江集」（一〇巻）が知られている。

三―八　孟東野

唐中期の詩人孟郊のことで、東野はその字である。進士に合格し、官吏となったが、官僚生活になじまず作詩にふけった。友人の韓愈に詩を認められ、高く評価されるようになった。詩風は生活を反映したものが多く、窮苦、怨恨の詩が多い。「孟東野全集」（一〇巻）がある。

三―九　蘇東坡

北宋の政治家、文人蘇軾のことで、字は子瞻といい、東坡はその号である。早くから進士となり、中央で活躍したが、地方官に左遷されたこともあった。一時は旧法派の中心として重きをなしたこともあった。文人としては、唐宋八大家の一人であり、有名な「赤壁賦」をはじめ多くの詩を作り、北宋文学の最高峰である。

三―一〇　張横渠

北宋の学者張載のことで、字は子厚といい、横渠先生と呼ばれる。進士に合格して地方官となり、一時中央に勤めたこともある。学説は、儒学、老荘、仏教の思想が一体となったもので、宇宙の一元的解釈を解いた。著書に「易説」「西銘」「正蒙」等がある。

三―二　嚴子陵

後漢の高士で、名は光といい、子陵はその号である。若い頃には、光武帝とともに学んだ。光武帝は、即位の後子陵を捜すと、羊の皮衣を着て釣をしていたといわれている。光武帝の側近として活躍したが、のちには官を去り、また釣や耕作を楽しんだ。

三―三　楊子雲

漢の儒学者楊雄のことで、子雲はその字である。幼少より学問を好み、博覧強記であったが、吃りで人と劇談することができなかった。漢の成帝、哀帝、平帝に仕え、「易経」「論語」にならって「太玄」「法言」を作った。

三―三　郭子儀

唐時代中期の武将である。武官登用試験に優秀な成績で合格し、安禄山の乱では節度使として各地を転戦、戦功をあげた。玄宗、粛宗、代宗、徳宗四帝に仕え、唐王朝のために活躍した。

三―四　李白

唐の詩人で、字は太白といい、青蓮と号した。若い頃から詩書にすぐれ、任侠の徒と交わったり、隠者とともに山にこもったりした。のち官吏となり都に出たが、讒言にあい地方放浪の生活を続け、六二歳で病歿した。杜甫と並び盛唐期詩人の最高峰とされ、流動感に富む明るい詩が多い。

三一五　程伊川

北宋の儒学者程頤のことで、字は正叔といい、伊川先生と呼ばれる。程顥の弟で、兄とあわせて二程子といわれ、少年の頃から二人そろって周敦頤に学び、張載とも交際があった。五〇歳を過ぎてから官吏となったが、政争に敗れて地方に流された。宋学の大綱を完成させたと言われ、「易伝」「経説」等の著書がある。

三一六　程明道

北宋の儒学者程顥のことで、字は伯淳といい、明道先生と呼ばれる。進士に合格して地方官として勤めた後、一時中央の官吏となったが、王安石と意見が合わず再び地方官となった。弟の程頤と反対に、性格は寛厚であったといわれている。彼の学説は、程頤に引き継がれて宋学の完成を見た。

三一七　張子房

前漢の功臣張良のことで、子房はその字である。始皇帝を襲撃したが失敗して、下邳に隠れ、そこで黄石老人から太公の兵法書を授かったと伝えられる。漢の高祖に従って立ち、軍師となり大功を立てた。また、鴻門の会の戦では、彼の策で劉邦の危機を救い、漢帝国創建に大きな役割を果たした。

三一八　董仲舒

前漢の儒学者である。若くから春秋公羊学を修め、猛勉強をしたと言われる。景帝のとき博士となり、武帝の時代には儒学を国の正統思想とすることを主張し、これがきっかけで儒教の国教化が実現した。その後、官位にとどまって罪を受けることをさけ、病気と称して辞任した。辞任後は、もっぱら修学著書に力を注いだ。

三―一九　張南軒

南宋の儒学者、政治家張栻のことで、字は敬夫といい、南軒はその号である。宰相張浚の子で、孝宗に仕え、その信は厚かった。彼の学問は、程顥の影響を受けており、朱子とも親交があった。「南軒集」等の著書があり、特に論語、孟子の注釈に特色がある。

三―二〇　岳飛

南宋の武将で、字は鵬挙という。農民の子として生まれ、文武に秀れたと伝えられる。北宋末義勇軍に応募し、次第に武将として頭角をあらわした。高宗の信任が厚かったが、秦檜によって罪をきせられ、殺された。のち無実の罪とわかり官が復され、英雄として尊敬された。武将に珍らしく学問があり、書も良くした。

三―二一　周公

周初期の名臣周公旦のことである。周文王の子で、武王の弟にあたる。武王を助けて殷を滅ぼし、武王の死後は幼少の成王を補佐して周王朝の基礎を固めた。また、周公は孔子をはじめとする儒家から尊敬され、儒教の礼は彼から始まると伝えられる。魯の侯王となり、その子孫は戦国時代まで続く。

三―二二　太公

周初期の功臣呂尚のことである。渭水の岸で釣をしている時に周文王に見い出され、その師となった。文王の祖太公が望んでいた人物そのものであるという意味から太公聖と呼んだ。のち周公、召公等とともに武王を助け、殷を滅ぼし周王朝の発展に尽した。斉に封ぜられ、戦国時代の大国斉の基礎を固めた。

三―三　包拯

北宋の政治家包孝肅のことで、拯はその諱、孝肅は謚である。仁宗に仕えて、特に訴訟曲直を正し、その名裁判が後世まで伝えられている。

三―四　高太尉

三―三五　蒼頡

黄帝の史官で、初めて文字を作ったと言われる伝説上の人物である。鳥の足跡を見て文字を思いついたという。

三―三六　皐陶

舜の臣で、法理に良く通じ、法や刑を作り、また獄を造ったといわれている。

三一二七　白楽天

唐時代中期の詩人白居易のことで、楽天はその字である。進士に合格し、官吏となり、中央、地方官として要職についた。のち政治に情熱を失い、草堂を香炉峯下に建てて詩作に励んだ。若い頃には社会諷刺の詩が多いが、後年には感傷的な詩が多くなる。人口に膾炙した詩が多く、我が国の文学に大きな影響を与えている。

三一二八　杜甫

唐時代中期の詩人で、字は子美である。進士の試験に失敗し、流浪の旅を続けたが、のち官吏になった。しかし、不遇で生活は困苦をきわめた。その生活の中に詩を楽しみ、李白と並び中国最大の詩人といわれる。李白の明るく豪快な詩に対して、杜甫の詩は非観的で、社会全体の矛盾を直視した詩が多い。特に律詩を得意とし、絶句を得意とした李白と並べて「李絶杜律」といわれている。

三一二九　司馬温公

北宋の政治家、歴史家司馬光のことで、字は君実といい、死後温国公をおくられたので司馬温公と呼ばれる。進士に合格して、官吏として栄進を期待されたが、王安石に反対して中央を去り、「資治通鑑」（二九四巻）の編集に従事した。この本は、編年体で書かれており、以後の歴史家に与えた影響が大きい。

三一三〇　邵康節

北宋の学者邵雍のことで字は堯夫といい、康節はその諡である。数による宇宙観、自然哲学を基にして経綸の道を説いた。「邵子全集」（全二四巻）の著書がある。

三―三　蔡九峯（さいきゅうほう）

南宋の儒学者蔡沈（さいしん）のことで、字は仲黙である。若い頃から朱熹と交わり、経学を研究した。九峯山に居住していたので、この学派を九峯学派という。

三―三　蔡西山

三―三　狄仁傑（てきじんけつ）

唐の宰相で、字は懐英という。高宗時代から重用されていたが、則天武后の時代に宰相となった。武后の信任が厚く、国老として尊敬された。

以上、木村探元筆の聖賢図に登場する人物を簡単に紹介したが、一〇七名のうち四名については、調査時間の不足もあり不明である。諸先輩の御教示をお願いする次第である。

また、現在は巻子の形式に仕立ててあるが、これが本来の姿であるかどうか、人物の配列を含めて検討の必要があるように思われる。今後の課題として調査を進める必要があろう。